灰色都市

黒羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灰色都市

【Ｎコード】
Ｎ４９３５Ｐ

【作者名】
黒羽

【あらすじ】
未来都市となった東京。
そこで逃亡している身の少年が、不思議な青年と出会う――――

学校の文芸部誌に載せたものに一部手を加えました。
短いので読みやすいかと思います。

01

少年は走っていた。
ただひたすらに、地面を蹴って。
闇の中で、吐く白い息が消えて行く。
もがいて両足がもつれ、倒れそうになりながら、訳もわからずに走った。
顔に吹き付けてくる冬の厳しい風さえ、今は心地よく感じる。

何から逃げている？
何のために逃げている？
そもそも僕は、どうして逃げている――――？

気がつけば、灰色のコンクリートの壁にもたれかかっていた。
投げ出された両足はつっていて、少年は体中の血が逆流しているように感じた。
酸素を求める肺が、心臓が、止まることを知らないように脈打っている。
目をうっすらと開けると、いつの間にか、雪が降り始めていた。
真っ黒な絵の具を垂らしたような夜の空に、青白い月がこうこうと輝いていた。
手の甲に降ってくる雪は冷たくて、溶けずに積もって行く。
手が冷たすぎるのか、と少年は、頭の片隅でぼんやり考えた。
身につけている服も薄い。普通ならもうすぐ凍え死ぬだろう。
これが死なら、死ぬのも悪くないと思う。
少なくとも、全力疾走した後で眠るように死ねるのだ。
少年にとって、何かから逃げることさえ、もうどうでもよくなって

いた。

02

少年の意識が遠のいてきた頃、辺りは突然の風に襲われた。
冬の厳しい風が、少年の体に容赦なく突き刺さる。
ぶるっと身震いして初めて、まだ生きていると少年は実感した。
吐く息が凍ってしまいそうだった。
目の前に鬱蒼と茂る木々が、ざわざわと、まるでひとつの生き物のようにうなる。
その時、少年の目に何かがちらつくのが見えた。
木と木の間に、小さな火のような赤い影が揺れた。

――――誰か、人がいる。
そう確信して、少年は唾を飲み込んで立ち上がった。
体は疲労で悲鳴を上げていたが、気にも留めず足を進めた。
せめて死ぬ前に、誰でもいい、誰かに会いたい。
コンクリートで舗装された道路を横切ると、そこには時代にアンバランスな森が広がっている。
何もかもが機械化し、洗練、統一された“東京”には違和感のある光景だった。

林に一歩足を踏み入れ、なるべく音を立てないように進んだ。
明りに近づくと、少年はそこに人影があることを確認した。火を焚いて暖を取っているようだ。
それでも、折れた枝や枯れ葉を踏む小さな音だけは、どう頑張っても誤魔化しようがない。
人影――男が振り返った。

少年と目が合うその男はまだ若い。
少年とあまり年は変わらないように見えた。
「――――どうも、君もあそこの出？」
軽く会釈をして、青年は少年の服――汚れた灰色のつなぎを見て言った。
少年が小さく頷くと、青年は静かに笑った。
「警戒しなくていいよ……まあ初対面だし、そうするのが当たり前か。
僕は零。ゼロって呼んで」
ゼロは不思議な男だった。雪のように白い肌、灰色の目に銀色の髪がよく映えていた。
その透き通る、中性的な声には、自然に相手を惹き付ける力があるのかもしれない。
「君は？」
ゼロが、焚き火のそばに手招きした。
火を挟んで、青年と向き合う形になってしゃがみこむ。
火の温かさが、体中に広がっていくようだった。
「僕は光――ヒカルです」

ヒカルは、昨日、東京の西にある矯正施設から脱走した。
矯正施設とは、未成年の罪を犯した子どもを、文字通り矯正する施設だ。

「あそこは狂ってるよ……」
ゼロが、ぽつりと言葉を漏らした。さっきまでの友好的な笑顔とは違い、今はこわばった表情だ。
「だから君も逃げてきたんだろ？」
ヒカルが頷く。
「僕はあそこが嫌いだ……それに怖い」

「脱走してきた先輩として言うよ。あれは矯正なんかじゃない。洗脳だね」
ゼロが冗談めかして笑った。それを見ているといくらか気持ちが落ち着いて、自然にヒカルも微笑んでいた。
施設を脱走してきて、良かったのかもしれない――――。
施設で過ごした日々が、いまだ脳裏に鮮明に刻まれていた。

03

ヒカルがそこへ入れられたのは、ヒカルが盗みをしていたからだった。
その頃の東京は今より治安が悪かった。凶悪な犯罪が後をたたず、ヒカルの家族も何者かによって殺された。
生きるためには、罪を犯してでも何かしなければいけない。
幼いながらにそう学んだ少年は、それからずっと食べるものを民家からくすねたり、盗ったものを売りながら生きてきた。
そして一年前、痩せこけて倒れていたヒカルを助けた者が偶然、施設の男だったのだ。

施設は、噂に聞いていた以上に酷かった。
収容されている同年代の子供はまるで生気がなく、みんな死んだような目をしていた。
毎日同じ仕事、決められた食事、睡眠。
施設では、”善良な市民”になるための、表向きには教育が行われる。
そこを出た者は皆、人畜無害な人間になっているのだ。
それがいいのか悪いのかは誰にもわからない。何しろ、無害な人間になる代わりに感情というものがまるで消えてしまうのだから。
人当たりの良い笑顔を浮かべるだけの毎日。
そんな先人を幾度となく見てきた遊び盛りの思春期の子供たちにとっては、まさに地獄のような場所だった。
耐えられなくて自殺をした者もいた。大抵の子どもは、気がおかしくなる。
そんな監視の厳しい中で、脱走を試みる人間はいなかった。

たったひとり、ヒカルを除いて。

「そりゃ大変だったね。生きるためには仕方のないことだったんだから」
しばらく二人の間に、沈黙の空隙が続いた。
火の燃えるぱちぱちという音が、消えそうになりながら沈黙を破っている。
「ゼロはどうして、あそこから逃げてきたの？」
少し無礼な質問だろうかと思いながら、ヒカルが口を開いた。
「僕？　僕は――――」
ゼロが、ふと口をつぐんだ。聞いてはいけなかったのかと、ゼロの表情を窺う。
「自暴自棄になって、逃げ出した、って言うよりも飛び出してきたって方が正しいかも」
自分の言葉に嘲笑し、小さくなってきた火に枝の束を投げ入れた。
「僕には昔、って言っても何年か前のことだけどね。恋人がいたんだ――――」

ゼロは子どもの頃、貧しかった家族――病気の母と小さな妹のために街へ働きに出た。
そこで出会ったのが、主人の娘のユキ。下働きのゼロにも優しかったユキに、少年はいつの間にか、
心を惹かれていた。

「僕とユキはそれから、休みの日は街へ出て遊んだり、一緒に学校へも通ったんだ。
一度、親父さんのバイクで走ったときはひどく怒られたな。一週間食事抜きだった……」

昔を懐かしむ遠い目で、ゼロは淡々と語った。

ある時、ゼロが働いていた街で、強盗事件があった。
ゼロは偶然その場に居合わせたというだけで捕えられ、施設送りになったのだ。

「施設で過ごした一年はひどかったよ。あんなところ、実態は善良で無害な市民に育てる洗脳施設だ」
頷く代わりに、ヒカルは空を仰いだ。
木々の間から見えるのは、うっすらと白色を帯びてきた空。
辛い体験をしていたのは自分だけじゃない。そう感じて、いくらか心が軽くなった。
「そんなときに、ユキが死んだっていう知らせを聞いたんだ。交通事故だった」
泣きたいのを必死でこらえるような、ぎこちない表情。
「僕は彼女のいない世界に生きる意味なんてない、ってそして飛び出したんだ。今思うと馬鹿な行動だけど、せめて生きてる間にもう一度、ユキに会いたかったな……」
ゼロの綺麗な灰色の目を、暗い影が覆った。
「でも、ゼロは僕と違って無実だったんだ、そうでしょ？」
「ああ。でも施設(あそこ)にとったらそんなこと関係ない。善良な市民を作り出すに越したことはないよ」
わずかな沈黙を遮るように、二人の頭上で小鳥が鳴いた。
辺りは真っ暗だったのが嘘のように、光に満ちている。
「もう朝か……こうして話していると、時間がたつのがあっという間だ」
ヒカルは、消えそうに燃えている火を見つめた。
数時間前まであんなに死にそうになりながら走っていたのに、今は何故か、生きる気力が湧いている。
「ヒカル、これからどうする？　いつまでもここにはいられないか

ら――――」
そう言ってゼロが、足で火を消す。途端に真冬の現実が戻ってきて、体が震えた。
ゼロの問いかけに、ヒカルは少し考えて急に不安が募った。
「施設の人に見つかって、逆戻りさせられたりしないかな」
「ああ、それなら大丈夫だよ。あいつらもこんなとこまでは探したりしないよ。
都会の、もっとちゃんとした場所なら別だろうけど。失敗作には興味がないだろうし……」
周囲の鬱蒼とした森を見渡して、自嘲じみて笑う。
「じゃあ、僕は故郷の東京に帰るよ。行く当てなんてないけど。ゼロは……どうするの？」
ゼロが、立ち上がって伸びをする。
「僕も東京へ行こうかな。彼女と初めて遊びに行った、思い出の場所なんだ」
ヒカルも立ち上がり、服にくっついた土をはたきながら、森を一瞥した。

04

ゼロに連れてこられたのは、ひどく田舎の駅だった。
小さくて、木で出来たホームは、少しの衝撃でも潰れてしまいそうだ。
しばらくして、揺れの激しい電車に乗り込んでも、二人は無言だった。
他に乗客のいない電車は、少し寂しすぎる。ヒカルは無意識に、露で白くなっている窓の向こうを眺めた。
景色は次第に、森から建物の多いものへと移り変わっていく。
「ゼロ……僕は、あそこから逃げてきてよかったのかな」
ヒカルがうつむきながらぽつりと口を開いた。
「まだよくわからないんだ。僕だけ逃げてくるなんて、何だか卑怯な気がして……」
「うーん、そうだな……。確かに逃げることはマイナスだけど、結果的に自分にプラスになるんだったら、それでいいんじゃないかな」
ゼロは、いつもの穏やかな表情を少年に向けた。
「ヒカルがこれで良かったって思えるなら、結果オーライだ」
向けられた笑顔に、寒い日なのに、体の芯から暖かくなった。
いつか、こうして良かったと思える日が来るなら――――。
白い息を吐き厚く着込んだ乗客も、徐々に増えた。終点は近い。

05

駅を出ると、二人は思いっきり空気を吸い込んだ。
目の前に広がっているのは、姿は変わっているけれど、確かにヒカルの故郷・東京だった。
昔とは違い、今は民家も何もかも、全て同じ形、灰色に統一されている。
ひとつだけ変わらないのは、人だった。
矯正施設にいた頃に出会った人間とは違い、ここで生活する人はみんな、生き生きとしていた。
少し行ったところには、朝市で込み合い、にぎわっている通りがある。
懐かしい匂い、音、景色。
ここにいれば、施設で過ごしたことなんかすぐに忘れてしまいそうだった。
「なあヒカル、思い出したよ。昔、僕の爺さんが言ってた」
少しの時間しか経っていないのに、随分久しぶりにゼロの声を聞いたような気がした。
「知ってるか？　昔の東京は、もっと活気があったんだって。いざこざや事件なんかは今も昔も変わらずあるけど、でも、今よりずっと生きるのが楽しかったって爺さんが言ってた。
――――そんな時代に生まれていたらきっと、毎日が楽しくて死ぬのが惜しいって思えるんだろうね」
その時、何故かゼロが遠くに行ってしまうような気がして、思わずヒカルは振り返った。
そこには、歩道を行きかう街の人々を眺めるゼロの姿があった。

「じゃあ、僕はもう行くよ。親父さんや、家族にも会いたいし」
「ゼロ、あの、ありがとう。あの時君が森にいなかったら僕、今頃死んでたよ」
「感謝するなら僕じゃなく、偶然の神様に感謝してくれ。それに僕も、君と出会ったことで楽しかったよ。ずっと一人だったから」
二人は笑い合い、微笑みを残したまま向き合った。
そして、何も言わずゼロが背中を向けて歩き出した。

「また会えるかな、ゼロ……！」
ヒカルが、歩き始めたゼロに向かって呼びとめる。
言いたいことが、どんどん込み上げてくる。言葉になる前に、消えていく。
ゼロは振り返らず、右手をひらひらさせながら言った。
「さあなー！　少なくともお互い、あの施設でばったり、なんてことにはならないようにしよう！」
そう言ってゼロは、雑踏の中へ消えていった。
姿が見えなくなるまで見送り、やがてヒカルは、反対の方向に向き直った。
その面持ちは、自然と希望に満ちていた。

そして、少年は一歩踏み出す。
灰色に染まった東京の中へ。
何が待ち受けているかわからない、遠い未来へ――――。

０５（後書き）

書き終えました……！　といってもワードの文章をコピペしただけなんですけどねｗｗ

拙い文章ではあると思いますが、最後まで読んでいただけたなら幸いです。

コメントも随時受け付けております。

最後に。

灰色都市の細かい設定とかは私のブログにてちまちま書く予定です。

よければそちらの方もどうぞ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4935p/

灰色都市

2010年12月14日12時55分発行